

近代語における文補語標識「こと」の使用について

——中世語・近世語との比較を通して——

渡 邊 ゆかり

1. は じ め に

渡邊（2006）では、文補語標識「こと」「の」の使い分けに関する通時的研究の一環として、「聞く」「知る」「忘れる」「やめる」を述語とするコト止め文補語の出現率を、中世語と近世語とで比較した。

渡邊でこれらの動詞を取り上げた主な理由は、渡邊（2004a）（2004b）の調査において、中古語における知覚述語の「きく類¹⁾」、認識述語の「しる」、非存在化述語の「たゆ」「つく」「はつ」「やむ」が取るコト止め文補語の出現率が、現代語における知覚述語の「聞く」、認識述語の「知る」、非存在化述語の「やめる」のそれと著しく異なっていたことによる。

具体的に述べると、情報の所有を表す「きく類（中古語）」については、文補語が表すコトガラが未然のコトガラや重大性の高いコトガラである場合はコト止め文補語を取り、そうでない場合は連体止め文補語を取る傾向にある。一方、同じく情報の所有を表す「聞く（現代語）」については、文補語が表すコトガラがこのようなコトガラであるか否かに関係なくコト止め文補語を取る。

また、情報の所有を表す「しる（中古語）」についても、「きく類（中古語）」と同様、文補語が表すコトガラが未然のコトガラや重大性の高いコトガラである場合にコト止め文補語を取り、そうでない場合は連体止め文補語を取る傾向にある。一方、情報の所有を表す「知る（現代語）」については、文補語が表すコトガラがこのようなコトガラであるか否かに関係なく、コト止め文補語とノ止め文補語のいずれも取りうる。

さらに、非存在化述語の「たゆ、つく、はつ、やむ（中古語）」については、

1) 渡邊（2004a）の「きく類」は、「聞く」「きく」「聞ゆ」「きこゆ」を語基とする述語動詞に相当し、渡邊（2004b）の「きく類」は、「聞く」「聞ゆ」を語基とする述語動詞に相当する。

「きく類（中古語）」、「しる（中古語）」とは異なり、コト止め文補語を取る傾向にあるが、非存在化述語の「やめる（現代語）」については、コト止め文補語とノ止め文補語のいずれも取りうる。

なお、渡邊（2006）においてはこれらの動詞以外に「知る」と同じく認識の働きを表す「忘れる」についても調査を行った。

渡邊の調査の結果、情報の所有を表す「知る」が取るコト止め文補語の使用傾向については、中世語、近世語と時代が下るにつれ、現代語のそれに近づきつつあることが明らかになった。具体的に述べると、未然のコトガラを表すコト止め文補語の出現率は低下し、反対に已然のコトガラを表すコト止め文補語の出現率は上昇する。また、情報の所有を表す「聞く」「知る」、コトガラの失念を表す「忘れる」、ならびに「やめる」を合わせたもののコト止め文補語の出現率についても、「知る」と同様の傾向が見られた。

このような渡邊の調査結果は、文補語標識「こと」の働きの一つとして中古語に存在していた、コトガラの未然性を示す働きが、時代の変遷とともに衰退していったこと、ならびにそれに代わる新たな働きが生じていったことを物語っている。

従って、本稿では、渡邊の調査結果を参考にしつつ、近代語についても同様な調査を行い、「聞く」「知る」「忘れる」「やめる」が取るコト止め文補語の出現率が近世以降さらにどのように変化していったのかを明らかにすることを目的とする。

本稿の調査においては、CD-ROM 版『明治の文豪』、CD-ROM 版『大正の文豪』に収められている全作品から、「聞く」「知る」「忘れる」「やめる」が、コト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語を取っている表現例を対象とした。

以下、2では、「聞く」が取るコト止め文補語の出現率を、3では、「知る」が取るコト止め文補語の出現率を、4では「忘れる」が取るコト止め文補語の出現率を、5では「やめる」が取るコト止め文補語の出現率を取り上げる。また、6では、2－5の調査結果のまとめと考察を行う。

2. 「聞く」が取るコト止め文補語の出現率

2.1 近代語の「聞く」が取る文補語

文補語を取る近代語の「聞く」には、以下の表1、表2に示す「聞く1」「聞く2」「聞く3」が存在した。

表1 明治語の「聞く」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

明治語の「聞く」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合計
聞く1	文補語が表すコトガラによって発声する音を知覚する行為	0(0%)	3(6%)	47(94%)	50(100%)
聞く2	文補語が表す情報を所有する行為	2(33%)	1(17%)	3(50%)	6(100%)
聞く3	相手の指図を了承する行為	0(0%)	0(0%)	2(100%)	2(100%)
合計		2(3%)	4(7%)	52(90%)	58(100%)

表2 大正語の「聞く」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

大正語の「聞く」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合計
聞く1	文補語が表すコトガラによって発声する音を知覚する行為	0(0%)	5(11%)	41(89%)	46(100%)
聞く2	文補語が表す情報を所有する行為	36(92%)	2(5%)	1(3%)	39(100%)
聞く3	相手の指図を了承する行為	0(0%)	1(33%)	2(67%)	3(100%)
合計		36(41%)	8(9%)	44(50%)	88(100%)

次の(1)(2)は「聞く1」の、(3)(4)は「聞く2」の、(5)(6)は「聞く3」の表現例に相当する。

- (1) 自分はその草履の音の消るのを聞いていた。 (夏目漱石「行人」)
- (2) 膳の上のものが音を立てて覆るのを聞いたようだったが、
(有島武郎「或る女」)
- (3) その時宗助夫婦は、最近の消息として、安之助の結婚がとうとう春まで延びた事を聞いた。 (夏目漱石「門」)
- (4) 実之助は、十三になった時、初めて自分の父が、非業の死を遂げたことを聞いた。 (菊池寛「恩讐の彼方に」)
- (5) 留めるのも聞かずに歩いて便所へ行ったりした。
(夏目漱石「ころろ」)
- (6) それによると父は、二カ月前人のとめるのも聞かず、
(久米正雄「学生時代」)

まず、音の知覚を表す「聞く1」については、表1、表2に見るように、中世語、近世語と同様、明治語、大正語においてもコト止め文補語は取らな

い。ただし、中世語、近世語においては、連体止め文補語しか取らなかったのに対し、明治語、大正語においては、連体止め文補語に加えノ止め文補語も取るようになる。また、明治語、大正語ともにノ止め文補語の出現率は、連体止め文補語の出現率を大きく上回っている。

次に、情報の所有を表す「聞く 2」については、明治語は用例数が少ないので、いずれの文補語の出現率が高かったのかを判別することは難しい。しかし、大正語では、近世語以前とは異なり、コト止め文補語の出現率は、39 例中36例、92%と極めて高い。

最後に、本調査より登場した「聞く 3」については、明治語、大正語のいずれにおいてもコト止め文補語を取る例は存在せず、連体止め文補語もしくはノ止め文補語を取っている。

以上、近代語の「聞く」が取る文補語について見てきた。

次の2.2では、中古語と現代語とでコト止め文補語の出現傾向が大きく異なる「聞く 2」を取り上げ、中世語から近代語にかけてコト止め文補語の出現率がどのように推移したのかを見ていく。

2.2 中世語から近代語にかけての「聞く 2」が取るコト止め文補語の出現率の推移

渡邊では、中世語、近世語の「聞く 2」が取る文補語を、「ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表すもの、「イ. 述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラ」を表すもの、「ウ. 述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラ」を表すものの三つに分け、各々の出現率を調査した。結果は、表 3、表 4 の通りである。

『明治の文豪』『大正の文豪』を用いて、近代語の「聞く 2」についても同様の調査を行ったところ、結果は表 5 の通りであった。

表 3 中世語の「聞く 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率（渡邊 p. 29）

中世語の「聞く 2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	合 計
ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	3(100%)	0(0%)	3(100%)
イ.「聞く 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	0	0	0
ウ.「聞く 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	6(30%)	14(70%)	20(100%)
合 計	9(39%)	14(61%)	23(100%)

表4 近世語の「聞く2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率（渡邊 p. 29）

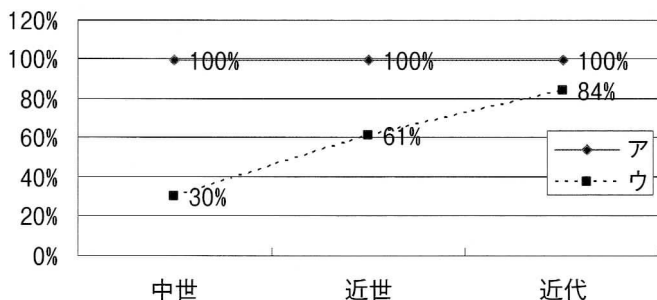
近世語の「聞く2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的 コトガラ	1(100%)	0(0%)	0(0%)	1(100%)
イ. 「聞く2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	0	0	0	0
ウ. 「聞く2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	11(61%)	7(39%)	0(0%)	18(100%)
合 計	12(63%)	7(37%)	0(0%)	19(100%)

表5 近代語の「聞く2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

近代語の「聞く2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的 コトガラ	1(100%)	0(0%)	0(0%)	1(100%)
イ. 「聞く2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	1(100%)	0(0%)	0(0%)	1(100%)
ウ. 「聞く2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	36(84%)	3(7%)	4(9%)	43(100%)
合 計	38(84%)	3(7%)	4(9%)	45(100%)

次のグラフ1は、上記の表3－表5のデータをもとに、中世語、近世語に用例が存在しなかったイを除き、ア、ウについて中世語から近代語までのコト止め文補語の出現率の推移を示したものである。

グラフ1 「聞く2」におけるア、ウのタイプのコト止め文補語の出現率の推移



まず、アのコト止め文補語の出現率については、グラフ1に見るように中世から近代に至るまで有意な変化は生じていない。

次に、ウのコト止め文補語の出現率については、渡邊の調査では、近世語の方が中世語より31ポイント高かったが、 χ^2 検定を行った結果、有意な差は認められなかった。しかし、グラフ1を見る限り、ウのコト止め文補語の出現率は、中世語、近世語、近代語と徐々に上昇し、近代語においては、80%を上回る出現率となっている。従って、中世語と近代語のコト止め文補語の出現率に有意な差があるか否かについて次のような χ^2 検定を行ったところ、 $P < .005$ で有意性が認められた。

表6 中世語、近代語の「聞く2」が取るウのタイプのコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 代	合 計
コト止め文補語	6(30%)	36(84%)	42
コト止め以外の文補語	14(70%)	7(16%)	21
合 計	20(100%)	43(100%)	63

$$\chi_0^2 = \frac{63(6 \times 7 - 36 \times 14)^2}{20 \times 43 \times 42 \times 21} = 17.72 > \chi_{0.005}^2 (7.88)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .005$$

ちなみに、近世語と近代語のコト止め文補語の出現率の差については、次のような χ^2 検定を行ったところ、 $P > .05$ で有意性は棄却された。

表7 近世語、近代語の「聞く2」が取るウのタイプのコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	近 世	近 代	合 計
コト止め文補語	11(61%)	36(84%)	47
コト止め以外の文補語	7(39%)	7(16%)	14
合 計	18(100%)	43(100%)	61

$$\chi_0^2 = \frac{61(11 \times 7 - 36 \times 7)^2}{18 \times 43 \times 47 \times 14} = 3.66 < \chi_{0.05}^2 (3.84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P > .05$$

従って、これらの結果と、グラフ1においてウのコト止め文補語の出現率が中世語から近代語にかけて徐々に上昇していることから、「聞く2」を述語とするウのコト止め文補語の出現率は、中世語から近代語にかけて有意に上昇したと見ることができる。また、このことと近代語におけるウのコト止め

文補語の出現率が80%を上回っているという言語事実は、中世語、近世語、近代語と時代が移行するにつれ、文補語標識「こと」の働きの中に、発話受容行為の対象となるコトガラを示す働きが新たに生じたことを示唆する。そして、このことは、さらに、文補語標識「こと」の働きの中に、この働きと、中古語においてすでに存在していた、発話伝達行為の対象となるコトガラを示す働きの両者を包括する、発話内容を示す働きが新たに加わったことを意味する。

以上2では、「聞く」が取るコト止め文補語の出現率について見てきた。

次の3では、「知る」が取るコト止め文補語の出現率について取り上げる。

3. 「知る」が取るコト止め文補語の出現率

3.1 近代語の「知る」が取る文補語

文補語を取る近代語の「知る」には、以下の表8、表9に示す「知る1」「知る2」が存在した。

表8 明治語の「知る」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

明治語の「知る」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合計
知る1	文補語が表すコトガラの経験的意味を獲得する行為	38(97%)	0(0%)	1(3%)	39(100%)
知る2	文補語が表す情報を所有する行為	84(49%)	23(13%)	65(38%)	172(100%)
合計		122(58%)	23(11%)	66(31%)	211(100%)

表9 大正語の「知る」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

大正語の「知る」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合計
知る1	文補語が表すコトガラの経験的意味を獲得する行為	56(97%)	1(2%)	1(2%)	58(100%)
知る2	文補語が表す情報を所有する行為	224(64%)	15(4%)	113(32%)	352(100%)
合計		280(68%)	16(4%)	114(28%)	410(100%)

次の(7)(8)は「知る1」の表現例に、(9)－(12)は「知る2」の表現例に相当する。

(7) 坊っちゃん機を見て奇麗に引き上げる事を知らぬ。

(夏目漱石「虞美人草」)

(8) 元来日本人は音楽と言うものを自ら教えることも知らないのでは

るから。 (芥川龍之介「侏儒の言葉」)

(9) あの女は今夜僕の東京へ帰る事を知って、笑いながら御機嫌ようと云った。 (夏目漱石「行人」)

(10) 細君も芳子に恋人があるのを知ってから、 (田山花袋「蒲団」)

(11) 滝という苗字の美術家なら二人あることは知っていますが、 (島崎藤村「新生」)

(12) 内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなったのを知った。 (芥川龍之介「鼻」)

まず、明治語、大正語の「知る 1」については、表 8、表 9 に見るように、中世語、近世語と同様、コト止め文補語を取る傾向にある。

次に明治語、大正語の「知る 2」については、表 8、表 9 に見るように、中世語、近世語と同様、コト止め文補語とそれ以外の文補語のいずれも取る傾向にある。

以上、近代語の「知る」が取るコト止め文補語の出現率について見てきた。

次の 3.2 では、中古語と現代語とでコト止め文補語の出現傾向が大きく異なる「知る 2」について、中世語から近代語にかけてコト止め文補語の出現率がどのように推移したのかを見ていく。

3.2 中世語から近代語にかけての「知る 2」が取るコト止め文補語の出現率の推移

渡邊では、中世語、近世語の「知る 2」が取る文補語を「ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表すもの、「イ、述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラ」を表すもの、「ウ、述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラ」を表すものの三つに分け、各々の出現率を調査した。結果は、次の表 10、表 11 の通りである。

表 10 中世語の「知る 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率 (渡邊 p. 33)

中世語の「知る 2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	16 (70%)	7 (30%)	23 (100%)
イ、「知る 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	6 (100%)	0 (0%)	6 (100%)
ウ、「知る 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	8 (16%)	41 (84%)	49 (100%)
合 計	30 (38%)	48 (62%)	78 (100%)

表11 近世語の「知る 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率（渡邊 p. 33）

近世語の「知る 2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的 コトガラ	43(98%)	1(2%)	0(0%)	44(100%)
イ、「知る 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	5(45%)	6(55%)	0(0%)	11(100%)
ウ、「知る 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	18(35%)	31(60%)	3(6%)	52(100%)
合 計	66(62%)	38(36%)	3(3%)	107(100%)

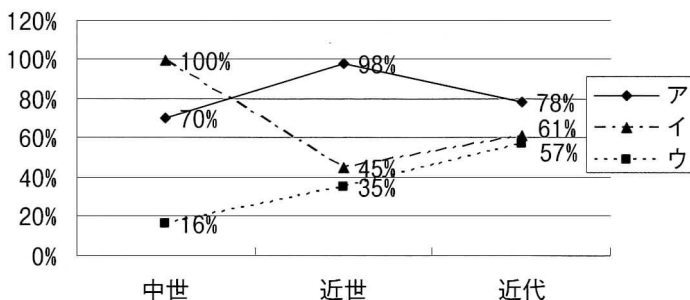
『明治の文豪』『大正の文豪』を用いて、近代語の「知る 2」についても同様の調査を行ったところ、結果は以下の表12の通りであった。

表12 近代語の「知る 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

近代語の「知る 2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的 コトガラ	29(78%)	4(11%)	4(11%)	37(100%)
イ、「知る 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	25(61%)	0(0%)	16(39%)	41(100%)
ウ、「知る 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	254(57%)	34(8%)	158(35%)	446(100%)
合 計	308(59%)	38(7%)	178(34%)	524(100%)

次のグラフ 2 は、上記の表10－表12のデータをもとに、ア、イ、ウについて中世語から近代語までのコト止め文補語の出現率の推移を示したものである。

グラフ 2 「知る 2」におけるア、イ、ウのタイプのコト止め文補語の出現率の推移



まず、アのコト止め文補語の出現率については、渡邊の調査においては、中世語と近世語との間に28ポイントの有意な上昇が見られた。しかし、グラフ2では、近世語から近代語にかけて20ポイント低下している。この差が有意な差であるか否かについて、次のようなイエーツの修正式を用いた χ^2 検定を行ったところ、 $P < .025$ で有意性が認められた²⁾。

表13 近世語、近代語の「知る2」が取るアのタイプのコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	近 世	近 代	合 計
コト止め文補語	43(98%)	29(78%)	72
コト止め以外の文補語	1(2%)	8(22%)	9
合 計	44(100%)	37(100%)	81

$$\chi_0^2 = \frac{81(43 \times 8 - 29 \times 1)^2}{44 \times 37 \times 72 \times 9} = 5.78 > \chi_{0.025}^2(5.02)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .025$$

従って、アのコト止め文補語の出現率については、近世語から近代語にかけて有意に低下したと見ることができる。ただし、近代語の出現率そのものは、78%とそれほど低くはない。これは、「こと」の意味の一つとして近世に確立した、非特定の抽象的な内容のコトガラを示す働きが近代に入り若干弱まってきたもののある程度は、保持されていることを示唆している。

現代語においては、このようなタイプの文補語が「こと」を取るか「の」を取るかについては、研究者により判断が揺れる。例えば、現代語における文補語標識「こと」「の」の使い分けに関する先駆的研究を行った Kuno (1973) は、「知る」がアのタイプの文補語を取っている次の(13)において、「の」に不自然であることを示す「*」を記している。

- (13) Watakusi wa kuzira ga honyuu-doobutu de aru $\left\{ \begin{array}{l} \text{koto} \\ * \text{no} \end{array} \right\}$ o
siranakatta. (Kuno の (29b))

しかし、McCawley (1978: p. 185) は、この Kuno の判断に対し、‘there are

- 2) 出現数が5以下のカテゴリーが存在する場合には、イエーツの修正式を用いることとする。

many people (including myself) who find the use of *no* acceptable (if not as good as *koto*)' と述べている。

このような判断の揺れは、近世語の文補語標識「こと」に存在した、非特定の抽象的な内容のコトガラを示す働きの弱体化が、現代語において近代語よりもやや進んだ可能性を示唆している。

次に、イのコト止め文補語の出現率については、渡邊の調査において、中世語と近世語の間に有意な低下が見られた。しかし、グラフ2では、近世語から近代語にかけては16ポイント上昇している。この差が有意な差であるか否かについて、次のようなイエーツの修正式を用いた χ^2 検定を行ったところ、 $P > .05$ で有意性は棄却された。

表14 近世語、近代語の「知る2」が取るイのタイプのコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	近 世	近 代	合 計
コト止め文補語	5(45%)	25(61%)	30
コト止め以外の文補語	6(55%)	16(39%)	22
合 計	11(100%)	41(100%)	52

$$\chi_0^2 = \frac{52(|5 \times 16 - 25 \times 6| - 52 \div 2)^2}{11 \times 41 \times 30 \times 22} = 1.60 < \chi_{0.05}^2 (3.84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P > .05$$

従って、このタイプのコト止め文補語の出現率は、近世以降、安定していると見ることができる。

次に、ウのコト止め文補語の出現率については、渡邊の調査において、中世語と近世語の間に19ポイントの有意な上昇が見られた。グラフ2では、近世語から近代語にかけてさらに22ポイントの上昇が見られる。この差が有意な差であるか否かについて、次のような、 χ^2 検定を行ったところ $P < .005$ で有意性が認められた。

表15 近世語、近代語の「知る2」が取るウのタイプのコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	近 世	近 代	合 計
コト止め文補語	18(35%)	254(57%)	272
コト止め以外の文補語	34(65%)	192(43%)	226
合 計	52(100%)	446(100%)	498

$$\chi_0^2 = \frac{498(18 \times 192 - 254 \times 34)^2}{52 \times 446 \times 272 \times 226} = 9.37 > \chi_{0.005}^2(7.88)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .005$$

従って、このタイプのコト止め文補語の出現率は、近世語から近代語にかけても有意に上昇したとすることができる。

以上3では、「知る」が取るコト止め文補語の出現率について見てきた。

次の4では、「忘れる」が取るコト止め文補語の出現率について取り上げる。

4. 「忘れる」が取るコト止め文補語の出現率

4.1 近代語の「忘れる」が取る文補語

文補語を取る近代語の「忘れる」には、以下の表16、表17に示す「忘れる1」「忘れる2」が存在した。

表16 明治語の「忘れる」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

明治語の「忘れる」が表す意味の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合計
忘れる1 文補語が表すコトガラの経験的意味を失念する行為	3(100%)	0(0%)	0(0%)	3(100%)
忘れる2 文補語が表すコトガラを失念する行為	65(54%)	17(14%)	38(32%)	120(100%)
合 計	68(55%)	17(14%)	38(31%)	123(100%)

表17 大正語の「忘れる」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

大正語の「忘れる」が表す意味の種類	コト止め	連体止め	ノ止め	合計
忘れる1 文補語が表すコトガラの経験的意味を失念する行為	2(67%)	0(0%)	1(33%)	3(100%)
忘れる2 文補語が表すコトガラを失念する行為	106(63%)	2(1%)	61(36%)	169(100%)
合 計	108(63%)	2(1%)	62(36%)	172(100%)

次の(14)(15)は「忘れる1」の表現例に、(16)－(19)は「忘れる2」の表現例に相当する³⁾。

3) (15)においては、主語の「宗教」が擬人化されている。

- (14) 事件が起ってからそれまで泣く事を忘れていた私は、その時漸やく悲しい気分誘われる事が出来たのです。

(夏目漱石「こころ」)

- (15) 宗教はその生命を自分自身の中に見出すことを忘れて、

(有島武郎「惜みなく愛は奪う」)

- (16) それでも人と人の間から婦人席の方を見渡す事は忘れなかった。

(夏目漱石「三四郎」)

- (17) 清の事を話すのを忘れていた。(夏目漱石「坊ちゃん」)

- (18) その瞬間にもう葉子はそこに倉地のいる事なども忘れて、急ぎ足でその方に走り近づいた。

(有島武郎「或る女」)

- (19) いいえ、それがね、その時に話するのを忘れて了ったんだけど、

(里見弴「多情仏心」)

まず、「忘れる1」については、表16、表17に見るように、明治語においては、中世語、近世語と同様、コト止め文補語を取る傾向にあるが、大正語においては、67%とややコト止め文補語の出現率が下がる。ただし、このような出現率の低下は、標本数にあたる「忘れる1」の用例数が、明治語、大正語のいずれにおいても3例と極めて少なかったことによるもので、有意な低下とは言えない。

次に明治語、大正語の「忘れる2」については、表16、表17に見るように、中世語、近世語と同様、コト止め文補語とそれ以外の文補語のいずれも取る傾向にある。

以上、近代語の「忘れる」が取る文補語について見てきた。

次の4.2では、「知る2」と同様、中古語と現代語とでコト止め文補語の出現傾向が大きく異なることが予想される「忘れる2」を取り上げ、中世語から近代語にかけてコト止め文補語の出現率がどのように推移したのかを見ていく。

4.2 中世語から近代語にかけての「忘れる2」が取るコト止め文補語の出現率の推移

渡邊では、中世語、近世語の「忘れる2」が取る文補語を「ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表すもの、「イ. 述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラ」を表すもの、「ウ. 述語動詞の表す動作時現

在において已然のコトガラ」を表すものの三つに分け、各々の出現率を調査した。結果は、次の表18、表19の通りである。

表18 中世語の「忘れる 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率（渡邊 p. 39）

中世語の「忘れる 2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	合計
ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	2(67%)	1(33%)	3(100%)
イ.「忘れる 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	8(89%)	1(11%)	9(100%)
ウ.「忘れる 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	2(25%)	6(75%)	8(100%)
合 計	12(60%)	8(40%)	20(100%)

表19 近世語の「忘れる 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率（渡邊 p. 39）

近世語の「忘れる 2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ 止 め	合 計
ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	0	0	0	0
イ.「忘れる 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	8(53%)	0(0%)	7(47%)	15(100%)
ウ.「忘れる 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	1(9%)	8(73%)	2(18%)	11(100%)
合 計	9(35%)	8(31%)	9(35%)	26(100%)

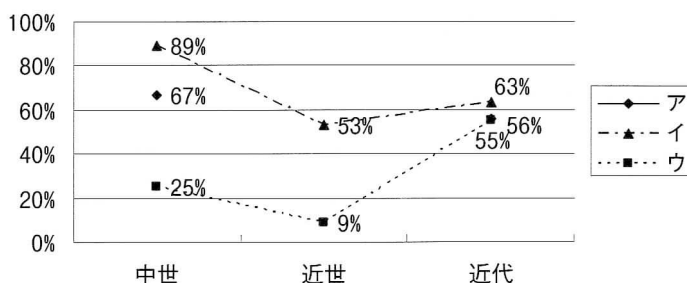
『明治の文豪』『大正の文豪』を用いて、近代語の「忘れる 2」についても同様の調査を行ったところ、結果は以下の表20の通りであった。

表20 近代語の「忘れる 2」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

近代語の「忘れる 2」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ 止 め	合 計
ア. 普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	5(56%)	3(33%)	1(11%)	9(100%)
イ.「忘れる 2」が表す動作時現在において未然のコトガラ	95(63%)	6(4%)	51(34%)	152(100%)
ウ.「忘れる 2」が表す動作時現在において已然のコトガラ	71(55%)	10(8%)	47(37%)	128(100%)
合 計	171(59%)	19(7%)	99(34%)	289(100%)

次のグラフ 3 は、上記の表18－表20のデータをもとに、ア、イ、ウについて中世語から近代語までのコト止め文補語の出現率の推移を示したものである。

グラフ3 「忘れる2」におけるア、イ、ウのタイプのコト止め文補語の出現率の推移



まず、アについては、渡邊の調査では近世語の例が存在せず、中世語と近世語とでコト止め文補語の出現率に有意な差があったか否かについて検証することはできなかった。中世語と近代語とでは、グラフ3のように11ポイントの開きが存在するので、この差が有意な差であるか否かについて、次のようなイエーツの修正式を用いた χ^2 検定を行ったところ $P > .05$ で有意性は棄却された。

表21 中世語、近代語の「忘れる2」が取るアのタイプのコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 代	合 計
コト止め文補語	2(67%)	5(56%)	7
コト止め以外の文補語	1(33%)	4(44%)	5
合 計	3(100%)	9(100%)	12

$$\chi^2_0 = \frac{12(|2 \times 4 - 5 \times 1| - 12 \div 2)^2}{3 \times 9 \times 7 \times 5} = 0.11 < \chi^2_{0.05}(3.84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P > .05$$

次に、イのコト止め文補語の出現率については、渡邊の調査において、中世語と近世語との間に、36ポイントの差が存在したが、イエーツの修正式を用いた χ^2 検定を行った結果、有意性は認められなかった。これは、中世語と近世語の標本数が共に極めて少なかったことに起因するもので、両者の標本数が多ければ、有意な低下が認められた可能性が存在する⁴⁾。

4) イのタイプの中世語と近代語の間にある26ポイントの開きについても、イエーツの修正式を用いた χ^2 検定を行ったが $P > .05$ で有意性は棄却された。

近世語と近代語については、グラフ3では、10ポイント上昇しているので、次のような χ^2 検定を行ったところ、 $P>.05$ で有意性は棄却された。

表22 近世語、近代語の「忘れる2」が取るイのタイプのコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	近 世	近 代	合 計
コト止め文補語	8(53%)	95(63%)	103
コト止め以外の文補語	7(47%)	57(38%)	64
合 計	15(100%)	152(100%)	167

$$\chi_0^2 = \frac{167(8 \times 57 - 95 \times 7)^2}{15 \times 152 \times 103 \times 64} = 0.48 < \chi_{0.05}^2 (3.84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P > .05$$

最後に、ウのコト止め文補語の出現率については、渡邊の調査において、中世語と近世語の間に有意な差は認められなかった。しかし、近代語のコト止め文補語の出現率は、近世語に比べ46ポイント高い。この差が有意な差であるか否かについて次のようなイエーツの修正式を用いた χ^2 検定を行ったところ $P < .005$ で有意性が認められた。

表23 近世語、近代語の「忘れる2」が取るウのタイプのコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	近 世	近 代	合 計
コト止め文補語	1(9%)	71(55%)	72
コト止め以外の文補語	10(91%)	57(45%)	67
合 計	11(100%)	128(100%)	139

$$\chi_0^2 = \frac{139(|1 \times 57 - 71 \times 10| - 139 \div 2)^2}{11 \times 128 \times 72 \times 67} = 10.68 > \chi_{0.005}^2 (7.88)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P < .005$$

従って、このタイプのコト止め文補語の出現率は、近世語から近代語にかけて、有意に上昇したと見ることができる。

以上4では、「忘れる」が取るコト止め文補語の出現率について見てきた。

次の5では、「やめる」が取るコト止め文補語の出現率について取り上げる。

5. 「やめる」が取るコト止め文補語の出現率

5.1 近代語の「やめる」が取る文補語

近代語の「やめる」には、表24、表25に示すように、「文補語が表すコトガラを中止する行為」を表すもののみが存在した。

表24 明治語の「やめる」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

明治語の「やめる」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合計
やめる	文補語が表すコトガラを中止する行為	4(21%)	0(0%)	15(79%)	19(100%)
合計		4(21%)	0(0%)	15(79%)	19(100%)

表25 大正語の「やめる」が取るコト止め、連体止め、ノ止め文補語数

大正語の「やめる」が表す意味の種類		コト止め	連体止め	ノ止め	合計
やめる	文補語が表すコトガラを中止する行為	0(0%)	0(0%)	10(100%)	10(100%)
合計		0(0%)	0(0%)	10(100%)	10(100%)

次の(20)－(22)は、近代語の「やめる」の表現例である。

- (20) けれども橋を向うへ渡って、小石川の坂を上る事はやめにして帰る様になった。(夏目漱石「それから」)
- (21) そろそろと天幕の所まで帰って来る。今度は中を覗くのをやめにした。(夏目漱石「野分」)
- (22) 君が？ 謙遜家を気どるのはやめ給え(芥川龍之介「河童」)

渡邊の調査では、この意味の「やめる」は、中世語においてはコト止め文補語を取る例しか存在しないが、近世語においてはコト止め文補語、連体止め文補語、ノ止め文補語を取る例が存在する。しかし、コト止め文補語の出現率については、中世語と近世語との間に有意な差は認められなかった。

次の5.2では、この「やめる」について、中世語から近代語にかけてコト止め文補語の出現率がどのように推移したのかを見ていく。

5.2 中世語から近代語にかけての「やめる」が取るコト止め文補語の出現率の推移

渡邊では、中世語、近世語の「やめる」が取る文補語を「ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ」を表すもの、「イ、述語動詞の表す動作時現在において未然のコトガラ」を表すもの、「ウ、述語動詞の表す動作時現在において已然のコトガラ」を表すものの三つに分け、各々のコト止め文補語の出現率を調査した。結果は、表26、表27の通りである。

表26 中世語の「やめる」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率（渡邊 p. 43）

中世語の「やめる」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	0	0	0
イ、「やめる」が表す動作時現在において未然のコトガラ	3(100%)	0(0%)	3(100%)
ウ、「やめる」が表す動作時現在において已然のコトガラ	0	0	0
合 計	3(100%)	0(0%)	3(100%)

表27 近世語の「やめる」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率（渡邊 p. 44）

近世語の「やめる」が取る文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ 止 め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	0	0	0	0
イ、「やめる」が表す動作時現在において未然のコトガラ	1(25%)	1(25%)	2(50%)	4(100%)
ウ、「やめる」が表す動作時現在において已然のコトガラ	0	0	0	0
合 計	1(25%)	1(25%)	2(50%)	4(100%)

『明治の文豪』『大正の文豪』を用いて、近代語の「やめる」についても同様の調査を行ったところ、結果は以下の表28の通りであった。

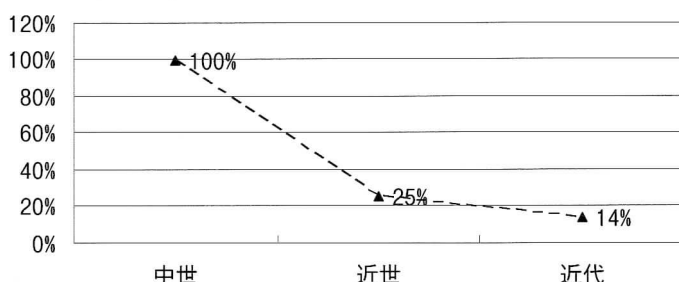
表28 近代語の「やめる」が取る文補語の種類と出現数ならびに出現率

近代語の「やめる」が表す文補語の種類	コト止め	連体止め	ノ 止 め	合 計
ア、普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラ	0	0	0	0
イ、「やめる」が表す動作時現在において未然のコトガラ	4(14%)	0(0%)	25(86%)	29(100%)
ウ、「やめる」が表す動作時現在において已然のコトガラ	0	0	0	0
合 計	4(14%)	0(0%)	25(86%)	29(100%)

上記の表26－表28が示すように「やめる」については、イのタイプの文補語しか存在しない。これは、「やめる」が、未来における動作の実現の可能性を取り消す行為であることに起因する。なお、「やめる」には、ここで挙げたコトガラの中止の意味と、継続中のコトガラの停止の意味を同時に表すものがあり、後者の意味が前景化した場合、文補語はウのタイプとして解釈されることとなる。が、ここでは前者の意味として分析を続けることとする。

次のグラフ4は、上記の表26－表28のデータをもとに、中世語から近代語までのイのコト止め文補語の出現率の推移を示したものである。

グラフ4 「やめる」におけるイのタイプのコト止め文補語の出現率の推移



グラフ4では、時代が下るにつれコト止め文補語の出現率が低下している。渡邊の調査においては、中世語と近世語とで75ポイントもの開きが存在したにもかかわらず、直接確率法を用いた検定の結果、両者の間に有意な差は認められなかった。ただし、この場合、有意性が棄却されたのは、両言語の標本数の少なさに起因するものであって、両言語におけるコト止め文補語の出現率の差とは無関係であると考えられる。すなわち、標本数が多ければ、中世語から近世語にかけてコト止め文補語の出現率に有意な低下が認められた可能性が存在する。

従って、ここでは、中世語と近代語、近世語と近代語とを比較することにより、時代の推移とともにコト止め文補語の出現率が低下したと言えるのかについて検討する。

まず、中世語と近代語については、以下に示す直接確率法による検定を行ったところ、 $P < .01$ で H_0 は棄却され、中世語と近代語の間には有意な差が認められた⁵⁾。

5) 出現数が0以下のカテゴリーが存在する場合には、直接確率法に基づく検定を用いることとする。

表29 中世語、近代語の「やめる」が取るコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 代	合 計
コト止め文補語	3(100%)	4(14%)	7
コト止め以外の文補語	0(0%)	25(86%)	25
合 計	3(100%)	29(100%)	32

H_0 : 中世語と近代語のコト止め文補語の出現率に有意な差はない

表30 H_0 を棄却すべきパターン

P_0	
3	0
4	25

$$P_0 = \frac{7!25!3!29!}{32!3!0!4!25!} = 0.007$$

$$\therefore P < .01$$

次に、近世語と近代語については、次のようなイエーツの修正式を用いた χ^2 検定を行ったところ、 $P > .05$ で有意性は棄却された。

表31 近世語、近代語の「やめる」が取るコト止め文補語の出現数

文補語の種類 \ 時代	中 世	近 代	合 計
コト止め文補語	1(25%)	4(14%)	5
コト止め以外の文補語	3(75%)	25(86%)	28
合 計	4(100%)	29(100%)	33

$$\chi^2_0 = \frac{33 \left(\left| 1 \times 25 - 4 \times 3 \right| - 33 \div 2 \right)^2}{4 \times 29 \times 5 \times 28} = 0.02 < \chi^2_{0.05}(3.84)$$

$$df = (2-1)(2-1) = 1$$

$$\therefore P > .05$$

上記の結果をまとめると、中世語と近世語、近世語と近代語の間には有意な差は存在しないが、中世語と近代語の間には有意な差が存在している。

従って、以上より、「やめる」を述語とするコト止め文補語の出現率は、中世語から近代語にかけて徐々に低下していったものと考えられる。なお、近

代語におけるイのタイプのコト止め文補語の出現率は、専らコト止め文補語を取るようになった「聞く 2」は例外として、「知る 2」が61%、「忘れる 2」が63%であるのに対し、「やめる」は14%と低い。

この差の原因としては、「知る 2」「忘れる 2」が認識の働きを表すのに対し、「やめる」が未来のコトガラの中止や継続中のコトガラの停止を表すという動詞の意味的相違に起因すると考えられる。この動詞の意味的相違がコト止め文補語の出現率とどのように関係するのかについては、6で言及することとする。

以上5では、「やめる」が取るコト止め文補語の出現率について見てきた。

次の6では、2-5までの調査結果をまとめると同時に、これに基づき、文補語標識「こと」の意味変化について考察を行う。

6. 2-5の調査結果のまとめと考察

まず、知覚動詞の「聞く」が取る文補語について取り上げる。

文補語を取る近代語の「聞く」には、音声の知覚を表す「聞く 1」と情報の所有を表す「聞く 2」と相手の指図の了承を表す「聞く 3」が存在した。

これらのうち、音声の知覚を表す「聞く 1」は、近世語以前ならびに現代語と同様、コト止め文補語は取らない。今回の調査では扱わなかったが、映像の知覚を表す「見る」についても、やはり中古語から現代語にいたるまでコト止め文補語は取らない。また、渡邊(2004a)の中古語の調査では、目前のコトガラに対する直接的な働きかけを表す「笑う」もまた、コト止め文補語を取らなかったが、現代語についても同様のことが当てはまる。これらの言語事実は、古代語から現代語に至るまで文補語標識「こと」に、述語動詞の表す動作の直接的な対象となるコトガラは表せないという使用制約が存在することを物語っている。

二つ目の、情報の所有を表す「聞く 2」については、文補語が已然のコトガラを表している場合のコト止め文補語の出現率が、中世語から近代語にかけ有意に上昇していることが確認された。中世語におけるコト止め文補語の出現率は30%であったのに対し、近代語においては、80%を上回っている。この「聞く 2」は、現代語においても近代語と同様、コト止め文補語を取る傾向にある。従って、これらの言語事実より、中世語(あるいは中古語)から近代語にかけ、徐々に文補語標識の「こと」に、発話受容行為の対象となるコトガラという新たな意味が加わったと見ることができる。また、発話受

容行為の対象となるコトガラは、次の図1が示すように、すでに中古語に存在していた、発話伝達行為の対象となるコトガラと類似関係にあり、これら二つのコトガラは、発話内容という上位概念に統括される。

図1 発話伝達行為、発話受容行為と関わる文補語標識「こと」の意味変化



従って、発話受容行為の対象となるコトガラを表す「こと」は、発話伝達行為の対象となるコトガラを表す「こと」からメタファー的意味拡張⁶⁾により派生されたと見ることができる。また、このことは、同時に、発話伝達内容を表す「こと」からシネクドキー的意味拡張⁷⁾により、発話内容を表す「こと」が新たに派生されたことを意味する。

三つ目の、相手の指図の了承を表す「聞く3」については、近代語において新たに確認されたものであり、コト止め文補語は取らない。このことは現代語についても当てはまる。これは、「聞く3」が「聞く1」と同じく目前のコトガラに対する直接的な働きかけを表していることに起因すると考えられる。

以上、知覚動詞の「聞く」が取る文補語について見てきた。次に、認識動詞の「知る」「忘れる」が取る文補語について取り上げる。

文補語を取る近代語の「知る」には、コトガラの経験的意味の獲得を表す「知る1」と情報の所有を表す「知る2」が存在した。また、文補語を取る近代語の「忘れる」には、コトガラの経験的意味の失念を表す「忘れる1」とコトガラの失念を表す「忘れる2」が存在した。

「知る」「忘れる」の一つ目にあたる、「知る1」と「忘れる1」は、コトガラの経験的意味を表す文補語を取るという点で共通しており、中世語に登場して以来、現代語に至るまで、一貫してコト止め文補語を取る傾向にある。従って、文補語標識「こと」の意味の中には、中世語より現代語に至るまで

6) メタファーとは、趣意と媒体が類似関係にある比喩をさす。

7) シネクドキーとは、趣意と媒体が上位概念と下位概念、あるいは下位概念と上位概念の関係にある比喩をさす。

コトガラを経験的意味という意味も存在しているということができる。また、このような意味が派生された時代が、「こと」に、アの普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラを表す働きが生じていく時代と一致することから、このような意味は特定の具体的コトガラに値しないというアとの類似性により派生されたものと考えられる。

「知る」「忘れる」の二つ目にあたる、「知る2」と「忘れる2」は、コトガラに対する認識の変化を表している点で共通しており、コト止め文補語の出現率に関しては、ほぼ同様な推移をたどっている。

まずアの普遍的・慣例的・教義的・教訓的コトガラを表すコト止め文補語について言えば、「知る2」「忘れる2」のいずれも、中世語から近世語に至るまで50%を上回っているが、80%を上回ったのは近世語の「知る2」のみで、近代語においては、両者とも80%を切っているという点である。

これらの言語事実は、3.2でも述べたように、近世において確立した、非特定の抽象的なコトガラを示す働きが近代に入り若干弱まってきたものの、ある程度は保持されていることを示唆している。

次に、イの未然のコトガラを表すコト止め文補語について言えば、「知る2」については、中世語において100%であったコト止め文補語の出現率が、近世語には45%まで有意に低下するが、近世語から近代語にかけては有意な変化が見られなくなる。また、「忘れる2」については、検定の結果、有意な変化は認められなかったが、グラフ上では、中世語において89%であったコト止め文補語の出現率が近世語には53%まで低下し、その後は、大きな変化が見られなくなる。

これらの言語事実からは、中古語の文補語標識「こと」に存在していた、コトガラの未然性を表す働きが中世語から近世語にかけて衰退する一方、文補語標識「こと」に新たな意味が派生され、その意味がコト止め文補語の出現率の低下を阻止していることが示唆される。然らば、新たに派生された意味とはどのようなものなのであろうか。

ここで問題となるのは、「知る2」「忘れる2」のイのタイプのコト止め文補語の出現率が、近世以降45%－63%の範囲内に収まっているという点である。このことは、「知る2」「忘れる2」の対象となるコトガラが、「こと」で示されるものと、0標識かもしくは「の」で示されるものとの二つの側面を持っていることを意味する。現代語における認識動詞が取る文補語について分析した渡辺（1997）は、この相違を「宣言的知識」と「実在」の相違で

あるとし、宣言的知識を表す場合は「こと」を、実在を表す場合は「の」を選択するとした。このような相違を前提とすれば、「知る 2」が、コト止め文補語とそれ以外の文補語のいずれも選択可能であるのは、「知る 2」が宣言的知識を所有する行為を表すと同時に、コトガラの実在を当然視する行為をも表しているからであると説明することができる。また、「忘れる 2」についても、コト止め文補語とそれ以外の文補語のいずれも選択可能であるのは、宣言的知識を失念する行為を表すと同時に、コトガラの実在を一時的にあるいは永久的に意識しなくなることを表しているからであると説明することができる。

最後に、ウの已然のコトガラを表す文補語についていえば、コト止め文補語の出現率は、「知る 2」「忘れる 2」ともに中世語においては30%を下回っているが、その後徐々に上昇し、近代語においては、「知る 2」が57%、「忘れる 2」が55%となる。また、未然のコトガラを表すコト止め文補語との出現率の差は、「知る 2」が4ポイント、「忘れる 2」が8ポイントと中世語と比較すると差はかなり縮まっている。

これらの言語事実は、「知る 2」「忘れる 2」が取る「こと」と「の」が各々宣言的知識と実在に対応しているという見解を支持している。

以上、認識動詞の「知る」「忘れる」が取る文補語について見てきた。最後に、非存在化動詞の「やめる」が取る文補語について取り上げる。近代語の「やめる」については、未然のコトガラの中止を表すもののみが存在した。ただし、この中には、次の(23)のように、未然のコトガラの中止と同時に継続中のコトガラの停止をも表すものが含まれている。

(23) やがて「あるじ」の首が、食べるのをやめていった。

(小泉八雲「ろくろ首」)

「やめる」が取るコト止め文補語については、「知る 2」「忘れる 2」が取るイのタイプのコト止め文補語と同様、中世語から近代語にかけて出現率の低下が見られた。このことは、繰り返し述べてきたように、文補語標識「こと」に含まれていたコトガラの未然性を示す働きが中世以降衰退したことを示している。

また、近代語において、コト止め文補語とそれ以外の文補語のいずれも取りうるのは、予定されたコトガラの宣言的知識を消去する行為を表すと同時

に未来のコトガラの実在を消去する行為をも表していることに起因すると考えられる。

さらに、近代語の「知る2」「忘れる2」が取るイのタイプのコト止め文補語の出現率が60%をやや上回っているのに対し、近代語の「やめる」が取るコト止め文補語の出現率が14%と低いのは、「やめる」の表す行為が、コトガラの実在性を大きく左右する行為であることによると考えられる。また、「やめる」の中に、継続中のコトガラの実在を消去するという、実在に対する直接的働きかけを表すものが含まれていることも原因の一つと見ることができよう。

7. お わ り に

以上、本稿においては、近代語における「聞く」「知る」「忘れる」「やめる」が取るコト止め文補語の出現傾向を中世語・近世語と比較しながら考察してきた。その結果、近代語における文補語標識「こと」の使用傾向が中世語・近世語に比べ現代語のそれになんかなり接近していることが明らかとなった。

参 考 文 献

- Kuno, Susumu (1973) "18 *Koto*, *No* and *To*" *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- McCawley, N. Akatsuka (1978) "Another Look at *No*, *Koto* and *To*: Epistemology and Complementizer Choice in Japanese" John Hinds (ed.) *Problems in Japanese Syntax and Semantics*. Tokyo: Kaitakusha.
- 吉川泰雄 (1950) 「形式名詞『の』の成立」『日本文学教室』3 蒼明社
- 渡辺ゆかり (1997) 「『記憶』動詞と『の』、『こと』」名古屋大学言語文化部編『言語文化論集』19(1)
- 渡辺ゆかり (2004a) 「中古の日記、随筆における文補語標識『こと』の使用について」『平井勝利教授退官記念 中国学・日本語学論文集』白帝社
- 渡辺ゆかり (2004b) 「中古語における文補語標識『こと』の使用について」広島女学院大学編『広島女学院大学論集』54
- 渡辺ゆかり (2006) 「中世語、近世語における文補語標識『こと』の使用について」広島女学院大学日本語日本文学科編『広島女学院大学日本文学』16